浪江のこころ通信

・第105号・

平成23年３月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年３月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト” は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信（※1）」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム（※2）が中心となり、全国各地のＮＰＯ、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※１ 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話しした「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※２ 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、ＮＰＯ、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第105号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979－1592
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX 0240(34)4593

浪江町ゆかりの人

思いをはせる浪江のこころ

未曾有の大災害により甚大な被害を受けたふるさと浪江町。

震災前にふるさとを離れた人、町と関わりがある人が抱く浪江町への思い、復興を支えるために果たしたい思いなど「浪江町ゆかりの人」の声をお届けします。

新潟県から「復興なみえ町十日市祭」に参加された皆さん

柴　恵美さん（請　戸）・**有賀　春香**さん（南相馬市）
渡邉　浩二さん（双葉町）・**堀川　浩之**さん（大熊町）
押見　敏昭さん（NPO法人地域活動サポートセンター柏崎）

取材者：特定非営利活動法人くびき野NPOサポートセンター　新保
取材日：12月19日

子供たちにつなぎたい故郷の風景

新潟県内に住んでいる福島県外避難者の希望者らが、11月23日・24日に開催された「復興なみえ町十日市祭」に参加しました。今回、実際に参加された４人と同行した支援スタッフの皆さんに集まってもらい、「復興なみえ町十日市祭」に参加した感想や故郷への思いをお話しいただきました。

▲十日市祭に行った思い出を振り返る皆さんと押見さん（右）

▲左から渡邉さん、堀川さん、有賀さん、柴さん

◆新潟での暮らしや近況について教えてください

柴さん　以前にもこの通信に掲載してもらいましたが、月日が経つのはあっという間です。私は小学校から高校まで浪江で育ち、浪江で暮らしていくことを当たり前のように思っていたので離れたくはなかったです。子供たちの故郷も浪江になるだろうと思っていました。震災を機に柏崎市に来ることになってからも、何度か福島県へ戻ることも考えましたが、子供たちの気持ちや学校生活のタイミングなどを考えると難しかったです。最近では、息子が柏崎市の成人式に出席し、娘はこちらの高校を無事に卒業しました。また、娘は浪江の友人とも会ったりしているようです。

有賀さん　私は南相馬市に住んでいました。高校時代は浪江に通っていましたし、旦那の実家も請戸だったので浪江は近くに感じています。旦那の仕事の都合で柏崎市に来ましたが、その後、母と祖母が南相馬市原町区の仮設住宅へ移り、旦那が福島県へ戻ったため、家族ばらばらの生活になってしまいました。柏崎市に来て初めて出会ったのが高校の同級生だった柴さんでした。縁があり今もこうして一緒に活動しています。

堀川さん　以前、母と叔母と3人で大熊町に住んでいました。震災発生後、避難所の体育館に入れず文化会館で過ごした後、新潟県にいた妹に迎えにきてもらい、借上げ住宅や中古住宅などで暮らすようになりました。それからも故郷の行政区の会合などにはできるだけ参加するようにしています。浪江には親戚がいたこともあり、幼い頃、バスに乗って遊びに行っていたのを思い出します。大人になってからもサンプラザへ買物に行ったり、十日市祭にも時々行ったりしていました。

渡邉さん　私は双葉町在住でしたが、職場が浪江のスイミングスクールだったため、もしかしたら知っている方も多いかもしれません。震災発生時もプールの中で被災、その後旧常葉町の施設で避難生活を過ごしました。当時、中学校2年生、3歳、乳幼児の3人の子供がいたので、少しでも安全で安心した生活ができるよう、妻の父を通じて柏崎市に避難してきました。子供たちも大きくなり、今ではここでの生活にすっかりなじんでいるようです。

◆「十日市祭」そして故郷に行ってみて

柴さん　十日市祭といえば、年に一度のお楽しみであり、ソフトボール大会が開催される日でした。今回、震災後会えずにいた友人に偶然会うことができ、とてもうれしかったです。

渡邉さん　私はダルマ市の方が懐かしく感じますが、十日市祭も地元の子供たちが楽しみにしていたのを知っていたし参加できてよかった。大熊町から国道288号を抜けるところに紅葉スポットがあるんだけれど、当日は雨で見ることができなくて残念でした。

▲十日市祭を楽しんでいるーこま

有賀さん　震災後初めて十日市祭に行けてよかったです。ただ、地元の風景はどんどん変わっていくなと感じました。

柴さん　震災後に何回か請戸にも行ったが、今回改めて行ってみて感じたのは、懐かしさというより違う空間にいるような感覚でした。

渡邉さん　実は私も似たような感覚。今回もそうだし、双葉町に行くときも、なんか故郷に帰ってきたというより、その地名の場所に行ったというような不思議な感覚ですね。

堀川さん　私も大熊町に自宅が残っているので一時帰宅で帰るときがあるけれど、そこにはゲートがあって気軽に「ただいま」と言って帰ることができない。家自体もイノシシなどに荒らされてしまっているので、なかなか故郷に帰ってきたという感じがしませんね。

柴さん　こちらでの暮らしが長くなり、故郷へ戻っても変化の過程を見ていないから帰るたびに不思議な感覚になりますね。

◆故郷への思いや気持ちを聞かせてください

柴さん　浪江が新たに生まれ変わってほしいというような期待より、人がいて、お店があって、学校に子供たちの声が響いて、という日常が戻ればいいなと思っています。やっぱり子供の声や笑顔って地域の活力になりますよね。

渡邉さん　新たな復興拠点ができたり、駅周辺に新しい宿泊施設などが設置されたりしている様子をみると、どういった意味があるのかと考えてしまいます。元どおりになることを願っているのに、新たな建物などが設置されることで故郷の風景が変わっていってしまう。

有賀さん　確かに、今まで住んでいた風景を思い出せなくなってきているかも。

柴さん　8年という月日が経ち、復興に対して住民、広域避難者、行政などによってそれぞれ距離感や感覚が変わってきていると思います。私はやっぱり安定を求めてしまうので、〝やっと〟と感じる今ここでの暮らしを壊したくない気持ちが大きいです。

渡邉さん　こちらでの暮らしが長くなると、故郷のことを考える時間も少なくなっています。復興やまちづくりに関わる方々は、一生懸命多くのことを考えていらっしゃるのも理解しているつもりです。故郷の町が新たな建物などでどう変わっていくかより、子供たちに何を見せられるか、何を残せるかだと思う。子供たちが育ったときに、「自分の故郷はこんな素敵なところだったよ」と伝えることができる町になるといいなと思います。

◆今回、柏崎から一緒に同行してみて

押見さん　参加者の皆さんが、十日市祭で地元の知人の方々とお会いして喜んでいる様子を伺うことができてよかったです。ここ柏崎市にも「えんま市」という同じようなイベントがあります。新潟県中越沖地震も経験しましたが、一つのお祭りが人と人や地域をつなぐ大切な縁になるのだなと実感しました。今回、実際に現地で見たり聞いたりしたことは言葉にならない体験でした。改めて、まずは自分ができること、そしてこれからも心に寄り添った支援を続けていきたいという気持ちを持つことができました。